

自信そぎ活躍阻む偏見

Next-Story

思い上がれない女性たち

私は「詐欺師症候群」経営者も自己否定



A D B 駐日代表の児玉治美さんも偏見と闘ってきた

の能力を低く見積もりがちで、挑戦や昇進に臆病になる。どこで女性たちは道に迷い、どうすれば自分を認められるのか。

「ペリー・アイリッシュ、インポスター（詐欺師）症候群と闘つ――」。7月下旬、こんなタイトルの記事がネットで配信された。「自分は良い仕事で十分できていない、あまり才能がないと感じていた」。史上最少で米グラミー賞主要4部門を獲得し、圧倒的に支持される彼女がなぜ、こんな不安げな言葉を？

「インポスター症候群」は1970年代に心理学者が提唱した。客観的に高い評価を得ても自分の能力や達成したことを肯定的にとらえられず、周囲をだましている詐欺師のような心理状態になることを指す。自分の実力を過小評価しがちな女性に多くみられるという

が、その思い込みを根拠がないことは多い。この言葉が有名になったのは、米フェイスブックの最高執行責任者（CEO）に上り詰めたシェリル・サンドバーグさんが2013年、ベストセラーとなった著書「リリー・イン」で「自分がペテン師ではないかと思えてきた」と打ち明けてからだ。

世界有数の影響力を持つフリーターの告白に多くの女性が自分の体験を重ね、勇気づけられた。一方で、彼女たちの頭にはこんな不安がよぎったか

「どこまでいけば『できる自分』に出会えるのだろうか」

国立女性教育会館が15年の新入社員約2100人を対象に実施した調査では、管理職を目指す理由について「自分には能力がないから」としたのは入社1年目で男性

が26・1%なのに対し、女性は38%に達した。聖心女子大学の教授らが07～10年に各国で実施した調査では「管理職をめざしたい」という質問に「どこでもそう思う」「まああそこ思う」とした日本の女性はわずか26%。60～70%台だった他国と比べて著しく低かった。

無意識で受容 「人生のあらゆる場面で女性は自分の力を疑ってしまう」。日本女子大学の大沢真知子名誉教授は、社会の「アンコンシヤス・バイアス（無意識の偏見）」が自信を奪う一因だと指摘する。

家庭や学校で、女の子は男の子に比べて聞き分けのある「良い子」であることを求められがち。その半面、間違えることを過度に避け、失敗すれば自分の能力や努力不足と落ち込む。CMやドラマでは女性が男性を補佐するシーンが頻繁に流れ「社会のあり方」としてすり込まれる。

社会人のキャリア初期には「女性の昇進を阻むガラスの天井」ならぬ「くつつく床」が待ち構えている（大沢さん）。キヤリア発展に見込みのな

い仕事振られたり、「女性には大変だ」との不要な配慮から負担の多い仕事が男性に回されたりする。失敗が回避される代わりに自信が身につかず、会議での発言や昇進を控えたりと「身の丈にあった」行動を自らとるようになった。重要なお仕事を将来を担う世代は「はったりでも、とにかく男性と同じレベルにたくこと」と話す。鹿兒島県の厳格な家庭で育ち、高校で掲げられていたのは「質実剛健、良妻賢母」。息苦しさから突発的に家出し、米国の高校へ編入した。日本で議員の政策担当秘書になったが、当時どこにいても年配の男性ばかり。作成した資料を渡すと配達係と勘違いされた。それでも議員不在の場で首相経験者2人の相手をするといった冷や汗をかき経験の数々が、自然と自信につながった。

若者から解消 講義を受けた男子生徒からは「大統領のような仕事に就くのは男性と男性がいない会議は開催を認めないなど、女性の存在を高める手を打つ。児玉さんも「女性を奮立たせて引き上げるのは私の義務」という。こう

「できる自分」を獲得する支えになる。

「できる自分」を獲得する支えになる。